

ン、お次ぎが、お次ぎが……」

十六 不孝娘か孝行娘か

「お母さん只今ツ……」

半分は電車に乗つても尙ほ半分はお拾ひで歸らねばならぬ小石川の塙末、それも、一里近くをラク／＼と歸つて来たおでん女史、塙末の裏店を潜つてその奥の一軒立ち、一軒立ちとは言つてもその實長家に等しき小さな古ッぼけた家、之れがおでん女史の塙であるが、今しも足を疲らして漸くのこと家の潜りを開けて、只今と言ふのは好いが言葉附きさへ威張つて居る。

「あゝ、お歸りか……」

優しく迎へ出るのは汚ない母親である。

「何んですねえツ、こんなに暗くなつたのに洋燈も點けないで……」

「それがね、お前ツ……今漸く油を買つて歸つて来たばかりの所なんだもの」
「何せ又早く手廻しをして置かないんですツ、暗くなることは時間で分るじやアありませんか」

「そんなことは知つて居るけれど、肝腎のお錢がないじやないか、お前ツ」
「じやアお錢がなくツて何うして買つたんですツ」

「仕方がないから屑を賣つて買つて来たんだわ、それも、屑屋が早く来て呉れば好いけれど今日に限つて馬鹿に遅いんだからね……」

「ほんとうに仕様がなないねわ、毎日々々お錢が無い／＼と言つて、妾もうつく／＼と厭になつて了つたわツ」

「それはもうお前などにこんなことは聞かしたくないんだけど、何うも遂お前の耳へも入るやうなもんでね……、そりやアお前も働いて呉れるんでお父さんも妾も大助かりなんだけれど、何んだツてお前、こんな貧乏世帯を繰り廻して居るんだも

の、聞かせまいと思つても隣ねえ……」

「もう好う御座んすよッ、そんなことは……」

「そりやアお前だッてね、中々容易なことではあるまいけれど、お父さんだッてお前……彼の年になつて巡査さんを勤めて居らッしやるんだもの……」

「もし聞きたくはあませんよッ、そんなことはッ」

「だからねお前もあんまり不平を言はないで……」

「もう分つたッたらね、煩さいッ、ほんとうにお母さんは口が八釜しいよッ」

「老人になるとお前……」

「はッ煩さいッ……、それよりかこの机の上は何うしたんですッ、こんなに散かし
て……」

「それもお前……掃除でもして置かうと思つたんだけど……何んだッてこんな老
人婆が一人でテントコ舞いをして居るんだもの、中々思ふやうにはねえ……」

「もう分りましたよッ、ほんとうにお母さんは口が煩さいよッ、好くもそんなに饒
舌れたもんだ……」

「饒舌る譯でもないけれど、老人になると途愚痴が出るんでね、お前ッ」

「それッ、それだからお饒舌だと言ふんですわッ、そんなに饒舌をして居る暇があ
るなら袴でも疊んで下さいなッ」

「アイ〜ッ、袴も疊むけれどアその邊へ押し附けて置いてお呉れよ、今は手が
廻らないんだから……」

「アラッ、洋燈が眞ッ黒じやアありませんかッ」

「オヤ〜ッ、之れでも好く磨いたつもりだけれど……」

「ソレッ、そんなに油煙が立つて居るじやアありませんかッ、間拔けたねッ」

「オヤ〜ッ、ほんとうにねえ、老人になると何うも眼が遠くなるもんで……」

「アラッ、右へ捻れば尙ほ眞が出るじやアありませんか、ほんとうに何處まで間拔

けなんだらう。仕様がないなえッ、アラッ、それじゃア右ですッて言ふにッ、好いから妾がしますよッ、妾がしますからさッさと御飯の準備でもしてさ下いなッ、なに、出来て居るんですッて、じゃア早く持つて来て下さいいなッ……あッ、ほんとうに疲勞て了つた……さう言へばお腹が空つて仕様がないわッ……」

ふづく不平を言ひながら、腰の曲りかゝつた憐れな母を無慈悲にも追ひ立て使ひ立て、御自分はそのまゝとろりと横

が、横になつたかと思ふ間もなく、娘に叱られた母親は又叱られまじと早くも膝を運んで来た。

「オヤッ、もう来たんですか……」

言ひながら、むくりと刎ね起きて。

「オヤッ、今日は何んにもないんですねえ……」

「ほんとうに氣の毒だけれど今日はまア之れで辛抱をしてお呉れよ、何んか買つて

置かうと思つたけれど、最前も言つたやうに今日は油を賣ふお錢さへないんだから……」

……」

「もう好う御座なんすよッ、分つて居るから……」

「でも餘り何んにもないんだからさ……」

「何んにもないと思つたら何んか作つて置いて呉れたら好いじやありませんかッ」

「さうも思つたんだけれどね……あッさうッ、お父さんのに取つて置いた佃煮が

あるんだが……」

「あるなら持つて来て呉れたら好いじやアありませんか」

「それは持つて来ても構はんがね、併しさうするとお父さんの副食物が……」

「お父さんの副食物なんか何うでも好いじやアありませんか」

「でもお可愛いさうだからねえ……」

「なアに構ふもんですか、あんな意氣地のないお父さんなんか……」

「でもねえ……」

「好いから持つてお出でなさいよッ、妾だつて之れでも稼ぎ人よ……」

「そりやアお前に云はれなくなつて好く知つて居るけれどさ……」

「ほんとうですわッ、お父さんなんざ彼の年になつて精々お巡査さんしか勤まらんじやアありませんか」

「それはさうだけれどさ……」

「妾は之れでも官吏よッ」

「そりやア云はなくなつて知つて居るがね……だがお父さんだつて可愛さうなものさ、彼の年になつてこつくと遣つて居らッしやるんだもの……」

「妾だつてこつくと遣つて居るじやアありませんかッ」

「それにお前……頭だつてもう大分に禿げてよ……」

「老人になれば頭だつて禿げるわッ」

「だからさ可愛さうじやないかねッ」

「だからさッ、妾だつて可愛さうじやアありませんかッ」

「そりやお前のことだつて充分に察しては居るけれど……」

「アラッ、汚ないねえッ、鼻水なんか流して……」

「なアに、之りやア涙よ……」

「アラッ、お母さんは泣いて居らッしやるのッ……ほんとうに縁喜でもない……ねえッ、御飯のお代りですよッ、アラッ、何んですねえッ、鼻水をこすッて……汚ない……ソレ、御飯がこぼれて居るじやアありませんかッ……イエッ、面倒臭いッ、お母さんにはもう頼みませんよッ、頼みませんから早く床でも伸べて下さいなッ」

十七 官吏なんぞアもうつくづく厭

「これ、おでんッ、おでんッ、お前もう七時になるよッ」

たゞさへ朝寝坊のおでん女史、今日近頃は役所へ往つても課長や同僚のおもわく餘りにおもわしからぬ所へ、分けて今日は月給日である、月給日と云つても例の辨當屋一件がある、お負けにそれや之れやの負債を合すると、残る所若干もない、若干もないのは好いが、實は父親始め母親などは、女史が今日の月給を少なからず當てにして居るのである、されば、両親をして失望せしむることの、さすがの女史も聊か忍びない、忍びないだけそりや之れやを思ふて心甚だ穩かでない、穩かでないだけ、役所のことなどは餘りに深く念頭がない、念頭がないだけ實はもう昨夕からそのつもりで今朝はフテ寝をするべく覺悟して居たのである。

『これ、おでんッ、おでんッ、おでんッたらねッ』
が、女史は平氣なもの、ぐうぐうと高聲。

『これッ、おでんッ、おでんッ、おでんたらねえッ、ほんとうに仕様がなによッ、何うしてこんなに寝坊だらう……、これ、おでん、おでんやッ』

『な、何んですねえッ……』

思はぬ意外の所へ強く鋭き突如の一喝を喰つたので、可愛さうに母親はうろくまごく、聊か呆氣に取られて居る、が、返答はしても女史は又もや布團を突ツ冠つてぐうぐうと解なので、母親今は何うして好いか分らない。

『ほんとうに仕様がないなねッ……』

母親の我れ知らず漏した獨語に寝て居る筈のおでん女史、何んと思つたのかによきりと首を出して、

『何んですッて、お母さんッ』

『アラッ、お前起きて居るのかねえ……』

『起きて居るのかもないもんだ、人が知らないと思つて悪口などを言つて……』

『アラッ、何んで妾が悪口などを言ふもんかね、餘り遅くなつたら否けまいと思つてそこで起したんじゃないか……』

「遅くなつたッて好いどやアありませんかッ」

「アラッ、じやア遅くなつても好いのかえッ」

「遅くならうが早くならうが大きなお世話だわッ」

「さうかえッ、妻は又そんなことは、知らないもんだかららう」

「知らなければ黙つて居らッしやいな、遅くなれば休むだけなんですもの……」

「アラッ、お前今日休むのッ……」

「誰が休むと言ひましたッ……」

「なアに、たゞ聞いただけなんだよ……」

「そんなことは餘計なことたわッ、だが何時なのッ」

「お父さんはもうととくに出て入らッしやつたよッ」

「そんなことを誰が聞きましたッ」

「でも……」

「妻の聞くのは時間のこッてすよッ」

「さうねえ、もう七時近いたらうよ」

「だらうじやア分りませんッ」

「だッてそりやアお前無理じやアないか、家には時計がないんだもの……」

「じやア好う御座んすわッ……」

「言ひながら、それでも氣にかゝるのかし今度は仕方なく厭々さうに起き上つて、

「オー眠い……ッ、全体何時頃だらう……」

「う……んと春伸をして、あゝアと欠伸をする途端、何處やらの時計はチン……と

七時を打つた。

「アラッ、もう七時だよッ、ほんとうに仕様がないなえ、何せお母さん早く起して

呉れないんですッ」

「だッてそりやアお前無理だよ、妻があれほど一生懸命に起したんじやないか」

「起したつて起きなければ何んにもならないじやアありませんかッ」

「そりやア妾の言ふこッたらうッ」

「まア好いわッ、そんなこと……早く御飯を出して下さいなッ」

「ちやアんと出来て居るよ」

「早く持つて来て下さいなッ」

「御覽ッ……茲へ持つて来てあるんじやないか」

「アラさう……」

「アラッお前……顔も洗はずに御飯を食べるのかえッ」

「好いじやアありませんかッ、妾が食べるんですもの……」

「時にお前……今日は月給日だらう……」

「何日ですえッ、日を繰つたら分るでしやう」

「月給日なら取れさす……」

「今日は如何程ばかり取れるの……」

「取つて見なければ分りませんわッ」

「でもさ、大概見當か附くだらう」

「さうねぬ、四位位もありますか知ら、それとも、ッと少ないか……」

「アラッ、お前ッ、五圓より少なかつた日にやア大變だよッ」

「大變だと言つたッて仕方がないじやアありませんかッ」

「でも五圓だけは當てにして居たんだからねえッ」

「當てになどして居るのが否けないわッ、取つて見ない中は分らないんですもの……」

「……」

「だッてお前、七圓の中だらう、七圓の中から五圓引けば二圓の小使じやないか」

「そんなことは言はなくたッて知つて居ますわッ」

「だからさ、二圓の小使があつたら大概澤山だらう、時偶の電車賃は妾の方から上」

「げるし……」

「少ツとも澤山なことはないわッ、澤山じゃないけれど妾だッて出来るだけの儉約はして居るんですもの……」

「そりやアねッ、出来ることなら妾だッて何も彼れ之れは言ひたくはないけれど、何んだッてお前家がこんなだからねえッ」

「だからさ、そんなことは言はれなくたッて知つて居るッたら……」

「それはもうさうだらうがね、所であの……今日は五圓位は取れたらうね、ねッ」

「だからさ、それが取つて見ない中では分りませんでば……」

「だッて大概分らうじやないか、小使と言つて別に大したこともあるまいし」

「所が中々大して居るわッ……」

「全体何んにそんなに要のさッ」

「何んにッて貴女、筆だッて墨だッて自分持ちでしやう」

「筆だッて墨だッてそんなに大したことはないだらう」

「それからお辨當……」

「お辨當は家から持つて行くじやないかね」

「だッてさうは行くもんですかッ、之れでも官吏ですもの、交際ッて言ふものがあ

りますわッ……」

「そりやア交際もあらうがね、併し辨當だッて大概知れて居るだらう……」

「所が中々知れて居ないわッ、西洋料理は貴所一品が十五錢よッ」

「アラッ、お前西洋料理なんか食べるのかえッ」

「だッて交際じやアありませんか、それに、平生人様から奢つて貰つて居るんです

もの、偶には奢りもしなければ……」

「そりアやもう言までもないけれど、併し、お父さんでさへ彼のやうなんだから……

先……お前だッて……」

「お前だッて何んだと言ふんですッ」

「否エエ、お前だッて少ッとはね……」

「じゃア妾が贅澤でもして居るといふんすかッ」

「なアに、贅澤なんて言ふんじやアないけれど……」

「好いわッ、妾もう官吏なんか止して丁ふから……」

「アラッ、お前何を言ッて居るんだねえッ……」

「好いわッ、詰らないッ、毎日新橋くんだりまでテク〜と通ッてさ、お負けに、歸ッて来ればお母さんに文句を言はれるんだもの……堪ッたもんじやアないわッ」

「アラッ、妾は何も文句を言ふんじやアないがねえッ」

「好いわッ、妾はもう官吏などは止して丁ひますから……」

「だからさ、妾は何も文句を言はんじやないかねッ」

「だから好いんですッてば、もう……」

「ナ、何を言ッてるんだねえッ」

「だからもう好う御座さんすよッ、官吏などは止して丁ひますから……あゝアッ、

ほんとうに官吏などは厭になつて丁つたッ、つく〜と厭になつた、あ……アッ、

あ……ッ」

滑稽女官吏 終

明治四十一年一月廿七日印刷
明治四十一年一月廿七日發行

（正價 金貳拾五錢）

著作者

五峰仙史

發行者

岩崎鐵次郎

印刷者

木村榮吉

印刷所

文英社

東京市京橋區采女町九番地



發兌元

東京市神田區鍋町廿一番地
電話本局三〇六七番
振替貯金口座番號四五二七番

大學館

(1) 大學館發兌小兒類書目

押川春浪君著 (寫眞版挿入)

● 世界怪奇譚 奇人の旅行 價廿五錢 郵稅四錢

二十世紀の勝栗毛は世界が舞臺である奇人あり其旅費百廿萬弗米國に鐵山王を驚かし太平洋に鯨西亞を回まし花の英國交際場裡に傍若無人の奇劇を演ず美人は馳る高嶽は魂消え讀者亦一讀三嘆

押川春浪君著 (寫眞版挿入)

● 世界怪奇譚 世界武者修行 價廿五錢 郵稅四錢

此の編節を分つ二十四冒頭の美人沐浴事件早く讀者の臍を奪ふ主人公剛金剛次が如魚神を提けて世界大陸を横行飛躍或は任侠或は變勇若眼珠尾の勝玉を控いて痛快壯絶

押川春浪君著 (寫眞版挿入)

● 世界怪奇譚 空中大飛行艇 價廿五錢 郵稅四錢

未曾有の新發明空中大飛行艇は日本の理學士と獨逸の博士の手に依つて成り博士はこれを濫用して美人天空に飛ぶの格事を惹起し巴里・全市の大問題となる理學士が發見する同志と共に捜索に向ふ壯絶驚駭を驚し痛恨天女を呼はしむ。

押川春浪君著 (寫眞版挿入)

● 世界怪奇譚 怪人奇談 價廿五錢 郵稅四錢

眉目清秀の一青年、一妖漢が咒文の爲めに其姿を醜惡なる友人の姿と變せられて煩悶痛苦する事幾旬再び元の體に回へる不思議なる話なり奇俠士は勇壯にして戰場の花は悲壯に共に婦女童幼の愛護描かざるべきもの

押川春浪君著 (寫眞版挿入)

● 世界怪奇譚 魔島の奇跡 價廿五錢 郵稅四錢

航海王の大變態船乗伯爵の初航海魔島の俘人同牛埋の法墓の底の殺人地球の極の魔山地底の美少年白髮の老人と九人の黒奴罪亡しの苦行片目と世界第一富婆羊に化けた人間美人城の驚歎舞空中電氣の作用三一二の金門人魚と幽霊の音楽航海王の歸國附録に「魔窟の三人」と「暗夜の白刃」を添ふ。

押川春浪君著 (寫眞版挿入)

● 世界怪奇譚 空中大飛行艇 價廿五錢 郵稅四錢

美人捜索に向ひたる空中大飛行艇の面々は瘴癘毒霧幾度か苦み猛獸美人の爲め難く途に美人を取戻し悪博士武術を誅し意氣揚々として歸來し巴里全市の大歡迎に局か結ぶ附録として警報機の新術に就いて讀者よりの答案を附したれば興味更に深きものある可也。

大學生發兌小說類書目

(2)

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 九死 冒險奇旅行 價廿五錢
支那の一姫子米國の一丈夫と交り、萬里の國程途に...

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 探險 奇人の航海 價廿五錢
空前奇妙探險の發明者絶海の寶島に隱る、扶桑國の一...

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 探險 新海底旅行 價廿五錢
青年と少婦と相探し海底を占領して日本版圖に加へ...

大學生發兌小說類書目

(3)

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 探險 幽霊 價廿五錢
船幽霊とは何か、奇術を弄して海上に各國の船船を...

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 探險 妖怪山の英雄 價廿五錢
非凡の傑人あり、亞弗利加の天地を震憾す、妻、妹、...

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 探險 生?死 價廿五錢
死の手は新ナポレオンを捉へたり、拔山蓋世の夜叉大王...

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 探險 月世界探險 價廿五錢
科學界の一大發明あり、月世界旅行機械これなり、...

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 探險 奇人の魔法 價廿五錢
黒赤二個の狼を懐き數百の狼軍を指揮して生殺與奪を...

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 探險 新ナポレオン 價廿五錢
乞食より帝王となりし英雄、追新たる三層と錯綜した...

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 探險 空中電氣旅行 價廿五錢
美人、月宮の中天に飛んで踪跡を失す、太陽に焚殺せら...

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 探險 食人國探險 價廿五錢
屠殺あり、生埋あり、水火の貴あり、大蛇の難あり、...

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 探險 續食人國探險 價廿五錢
英雄あり、美人あり、烈婦あり、快男子あり、才子あり...

大學生館發兌小書類目

(4)

乾坤獨步著 (寫真版挿入)
世界統一冒險譚第一編

●小説 青年英雄團 價廿五錢 郵稅四錢

世界統一論起り志士の合あり、日本の才女併優となつて巴里に譽價を博す忽ち西比利亞の空獄に囚へられて事件々々錯綜す!!

乾坤獨步著 (寫真版挿入)
世界統一冒險譚第二編

●小説 世界發展俱樂部 價廿五錢 郵稅四錢

俱樂部の總理は文武兼備の老練家、會員は多士濟々たり傑出せるは學殖深奥の青年と溫柔無慾の少女、眞にこれ双玉!!

乾坤獨步著 (寫真版挿入)
世界統一冒險譚第三編

●小説 怪中の怪 價廿五錢 郵稅四錢

稀代の珍寶を探らんとし「人殺し谷」の兇賊と戦ひ前代未聞の人? 獸を捕へ猿語を研究し、億万の富を致す美人才子哲士武人互に競ふ。

乾坤獨步著 (寫真版挿入)
世界統一冒險譚第四編

●小説 賊巢探險 價廿五錢 郵稅四錢

毒藥の採拾、美羽の狼獲、意外の處に意外の兇手、父子の再會、思はぬ赤繩、本編の経緯、奇々怪々の文字!!

乾坤獨步著 (寫真版挿入)
世界統一冒險譚第五編

●小説 キウリアス、アイランド 價廿五錢 郵稅四錢

新島出現して黄金測る可からず、探險の勇士美人沙漠を渡り象獵を試み、困難又困難功名果して難れの手に落つ!!

乾坤獨步著 (寫真版挿入)
世界統一冒險譚第六編

●小説 怪寶窟 價廿五錢 郵稅四錢

巖地に入りて慘刑に遇ひ不思議の術、秘傳の妙薬に依て蘇る、奇怪習俗に苦しみられて屈せず勇士美人遂に大功を立つ

大學生館發兌小書類目

(5)

羽化仙史著 (寫真版挿入)
小説 百難旅行

一難されば一難來り前門虎を防げば後門狼を迎ふ、幾度か宛に困み歴々災に遇ひ或は放浪、或は漂流、水火の巷に出入し劍戟の間に馳騁す、一少年が義勇と義膽とは誰む者をして感憤興起せしめんばあらず、遂にこれ冒險小説中の傑作。

加瀬花那氏著 (寫真版挿入)

●小説 モンゴリヤ妖怪村 價廿五錢 郵稅四錢

征露の役軍中より選まれて斥候として派遣せられたる三勇士が道を失ふてよりさまじくの怪事奇蹟に遭遇し或は虎に養はれ妖怪を退治し幽霊と闘じ危難に瀕し災厄に遇ひ遂に戦死せしと思はれし三勇士が恙なく歸つて大功を現はす快譚なり。

羽化仙史著 (寫真版挿入)

●小説 奇女無錢旅行 價廿五錢 郵稅四錢

一奇女あり容貌花の如く音聲玉を轉するが如し而も膽力遙に有聲男子を凌ぐ強中一錢の貯けなく英國、佛蘭西、獨逸、米國等歐洲大陸を跋渉し到る處奇蹟珍説の中心となる讀者幸に恍惚さして自失せずんば幸なり。

押川春浪著 (寫真版挿入)
世界奇談新アラビヤナイト

「アラビヤナイト」は天下の奇書にして胡くも小説を作るもの、一讀せざる事なし本書はステウエンソンの原書を基として著者が例の豊富なる思想を流暢なる筆を以て綴りたるもの、趣味遙に「アラビヤナイト」の上にあ

押川春浪著 (寫真版挿入)

●小説 奇怪塔 價廿五錢 郵稅四錢

奇怪塔あり、大戦亂を醸し、勇士の最期に及び黒百合花の發明となり、空前の大懸賞となり、將軍の幽霊を顯出するの奇譚を経とし、絶世の美人が勇俠を縛とす原書は歐洲大評判の小説更に著者の奇想を加へ麗筆を綴ふて此の編成る以て本書の趣味を知る可し。

押川春浪著 (寫真版挿入)

●小説 立身膝栗毛 價廿五錢 郵稅四錢

那翁が佛國の皇帝となりし時、玉座の前に來りし一少年こそ本編の主人公にて、其後那翁の批評の言に勵まされ、偉大の人物となりしや否やは彼れが運命の胸に跨つて奇なる人生の旅を試みし所の物語、山あり、河あり、美人あり、驚城あり、その面白き事恰も武者修行が世界各國を経廻り千變萬化の奇事に遭遇するさ異ならず。

大學生發兌小書類目 (8)

◎新空中旅行 (寫真版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
三浦天民君譯 (寫真版挿入)
一王國の王子が王位に即き攝政の叔父のため位を奪は
れ一孤塔の中に幽閉せられしに王子の降参當時より不
識なる老婆が此れに王子の飛行のためには是れを不
なり智識を増し故郷を眺めしめて自分の自在なる
位に還ると云ふ不思議なる少年小説なり。

◎航海奇譚 (寫真版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
押川春浪君著
大洋と言ふ己に快也、航海と言ふ己に壯也、奇譚といふ
に至つては己に就んで説きまざる能はず、太平洋を馳る船
大西洋に沈む船、甲板に起りたる神出鬼没の活劇、奇絶
にして趣味多く快絶にして感興甚だし。

◎貧乏旅行 (寫真版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
巖中の空乏は辻堂に泊して地蔵の慈悲を感じ橋銭を誤
り化して旅の憂さを悟り愈々進んで愈々究し愈々窮して
愈々勇を得此に於てか奇談百出珍語多しとして翻く一
葉窮民の窮乏を寫照するに足るものあり。

◎無銭旅行 (寫真版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
旅行の面白味は汽車に在らず、汽船に在らず、馬に在
らず、車に在らず、所謂徒歩無銭にして千山萬壑を放
するに在り、風を披ひ露を飲み乞食と合宿するな辛
の中に在り、此れ趣味の存するものあり、此書世に出
れぬ十数版を重ねたり以て如何に壯快なる讀物なるを
知。

◎野宿旅行 (寫真版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
鐵脚子著
汽車の便を捨てて自轉車の捷を藉らす膝栗毛に纏つて三
の風來漢が到處に滑稽を演じ失策を惹起し、而も衰放
の落一難に逢ふ毎に愈々勇を増し青天井に草枕を敷
實を破る履羅襪は糞ひ來る數萬の蚊軍を退却せしめ地
の正宗に對峙し往來來来と大手を振つて石野道の
香泉此上もなき一讀噴飯滑稽無比の旅行記なり。

大學生發兌小書類目 (7)

◎滑稽大寄席 (寫真版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
平井川南君著

◎滑稽落語集 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
巖中千高著

◎笑話百話 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
宮崎來城君著

◎笑話百話 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
巖中千高著

◎笑話百話 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
巖中千高著

◎笑話百話 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
巖中千高著

◎笑話百話 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
巖中千高著

◎笑話百話 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
巖中千高著

◎笑話百話 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
巖中千高著

◎笑話百話 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
巖中千高著

◎笑話百話 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
巖中千高著

◎乞食旅行 (寫真版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
巖中の空乏は辻堂に泊して地蔵の慈悲を感じ橋銭を誤
り化して旅の憂さを悟り愈々進んで愈々究し愈々窮して
愈々勇を得此に於てか奇談百出珍語多しとして翻く一
葉窮民の窮乏を寫照するに足るものあり。

◎一休和尚頓智笑話 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
野狐狂言著

◎大久保彦左衛門笑話 (寫真版挿入) 價十八錢 郵稅四錢
天嶺居士著

◎曾呂利新左衛門笑話 (寫真版挿入) 價十八錢 郵稅四錢
南園生著

◎大岡越前守頓智談 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
圓谷狂言著

◎水戸黃門奇行談 (寫真版挿入) 價十八錢 郵稅四錢
尾花庵二十坊著

◎大笑下女百話 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
尾花庵二十坊著

◎大笑小僧百話 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
年期小僧與太郎著

◎東海道膝栗毛 (寫真版挿入) 價十八錢 郵稅四錢
十返舎一九著

◎東海道膝栗毛 (寫真版挿入) 價十八錢 郵稅四錢
十返舎一九著

◎金毘羅宮島膝栗毛 (寫真版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
十返舎一九著

大學館發兌小說類書目

(10)

東京二六新聞連載 三宅青軒著 (寫眞版挿入) ●小説 我儘太郎 價廿五錢 郵稅四錢	東京二六新聞連載 三宅青軒著 (寫眞版挿入) ●小説 續我儘太郎 價廿五錢 郵稅四錢	鹿島櫻菴君著 (寫眞版挿入) ●小説 野原の怪郎 價廿五錢 郵稅四錢	萬朝報連載 三宅青軒著 (寫眞版挿入) ●小説 不思議の娘 價三十錢 郵稅四錢	曉風山人著 (寫眞版挿入) ●小説 秘密の怪洞 價廿五錢 郵稅四錢	鹿島櫻菴君著 (寫眞版挿入) ●小説 世界の秘密國 價廿五錢 郵稅四錢	鹿島櫻菴君著 (寫眞版挿入) ●小説 無底湖の秘密 價廿五錢 郵稅四錢	鹿島櫻菴君著 (寫眞版挿入) ●小説 不死の靈窟 價廿五錢 郵稅四錢	正岡義陽君著 (寫眞版挿入) ●小説 孤島の秘密 價三十錢 郵稅四錢	正岡義陽君著 (寫眞版挿入) ●小説 續孤島の秘密 價三十錢 郵稅四錢	兩廬舍主人撰 (寫眞版挿入) ●小説 怪僧 價三十錢 郵稅四錢	京北隱士著 (寫眞版挿入) ●小説 二人令嬢 價三十錢 郵稅四錢	加瀬花那君著 (寫眞版挿入) ●小説 仙窟 價十八錢 郵稅四錢	鹿島櫻菴君著 (寫眞版挿入) ●小説 美人島探險 價十八錢 郵稅四錢	三宅青軒著 (寫眞版挿入) ●小説 幽霊の寫眞 價廿五錢 郵稅四錢	河越輝子女史著 (寫眞版挿入) ●小説 怪美 價三十錢 郵稅四錢	押川春浪君著 (寫眞版挿入) ●小説 千年後の世界 價廿五錢 郵稅四錢	東京二六新聞掲載懸賞小説 (寫眞版挿入) ●小説 女優殺し 價三十錢 郵稅四錢	羽化仙史著 (寫眞版挿入) ●小説 妖姫の一生 價廿五錢 郵稅四錢	鹿島古武士著 (寫眞版挿入) ●小説 妖怪新百話 價十五錢 郵稅四錢
---	--	--	---	---	---	---	--	--	---	---------------------------------------	--	---------------------------------------	--	---	--	---	---	---	--

大學館發兌小說類書目

(11)

藤原嶺葉君著 (寫眞版挿入) ●小説 新不如歸 價三十錢 郵稅四錢	藤原嶺葉君著 (寫眞版挿入) ●小説 ハイカラ令嬢 價三十錢 郵稅四錢	藤原嶺葉君著 (寫眞版挿入) ●小説 續ハイカラ令嬢 價三十錢 郵稅四錢	藤原嶺葉君著 (寫眞版挿入) ●小説 可憐 價三十錢 郵稅四錢	藤原嶺葉君著 (寫眞版挿入) ●小説 續可憐 價三十錢 郵稅四錢	藤原嶺葉君著 (寫眞版挿入) ●小説 戀の 價三十錢 郵稅四錢	藤原嶺葉君著 (寫眞版挿入) ●小説 續戀の 價三十錢 郵稅四錢	花岡小史著 (寫眞版挿入) ●小説 戀の無縁 價廿五錢 郵稅四錢	無名氏著 (寫眞版挿入) ●小説 貞か不貞か 價三十錢 郵稅四錢	草の 人著 (寫眞版挿入) ●小説 戀の夫婦 價廿五錢 郵稅四錢	草の 人作 (寫眞版挿入) ●小説 人生の行路 價廿五錢 郵稅四錢	廣津柳浪君著 (寫眞版挿入) ●小説 女天の坊 價廿五錢 郵稅四錢	草の 人作 (寫眞版挿入) ●小説 戀の 價廿五錢 郵稅四錢	草の 人作 (寫眞版挿入) ●小説 戀の 價廿五錢 郵稅四錢	草の 人作 (寫眞版挿入) ●小説 戀の 價廿五錢 郵稅四錢	池田錦水君著 (寫眞版挿入) ●小説 戀の一年有半 價廿五錢 郵稅四錢	河村扶桑君著 (寫眞版挿入) ●小説 女學生氣質 價廿五錢 郵稅四錢	井上九穂君著 (寫眞版挿入) ●小説 新婚百話 價二十錢 郵稅四錢	花嫁新 價二十錢 郵稅四錢	河村扶桑君著 (寫眞版挿入) ●小説 武士道百話 價十五錢 郵稅四錢	長田偶得君著 (寫眞版挿入) ●小説 明治六十大臣 價三十錢 郵稅四錢
---	---	--	---------------------------------------	--	---------------------------------------	--	--	--	--	---	---	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	---	--	---	------------------	--	---

大館發兌小說類書目

(12)

墨堤隱士著 (寫真版挿入) 大臣の書生時代 郵税三十錢
 矢野治浪君著 (寫真版挿入) 食 郵税四十錢
 池田錦水君著 (寫真版挿入) 無錢修 郵税廿五錢
 墨堤隱士著 (寫真版挿入) 青年人物の食客時代 郵税十八錢
 墨堤隱士著 (寫真版挿入) 商人豪商の雇人の時代 郵税四錢
 西山筑濱君著 (寫真版挿入) 品性英雄の道樂 郵税二十錢
 桐友散士著 (寫真版挿入) 奇觀夜の女 郵税廿五錢
 覆面散士著 (寫真版挿入) 社會面明治娘評判記 郵税四錢
 原田東風君著 (寫真版挿入) 木賃 郵税廿五錢
 池田錦水君著 (寫真版挿入) 奧様と嬢様 郵税廿五錢

池田錦水君著 (寫真版挿入) 婦人との戀 郵税二十錢
 池田錦水君著 (寫真版挿入) 境遇の解 郵税四錢
 池田錦水君著 (寫真版挿入) 社會面戀の婦人氣質 郵税三十錢
 池田錦水君著 (寫真版挿入) 社會面女の心の解剖 郵税三十錢
 長田偶得君著 (寫真版挿入) 妖怪奇談 郵税十五錢
 篠原嶺葉君著 (寫真版挿入) 小説新婦の秘密 郵税廿五錢
 草の深山の夫婦 郵税廿五錢
 草の理山の夫婦 郵税廿五錢
 須藤寒泉君著 (寫真版挿入) 小説新家の庭妻 郵税廿五錢

府南野士著 (寫真版挿入) 小説新クレオパトラ 郵税廿五錢
 羽化仙史著 (寫真版挿入) 小説奇新クレオパトラ 郵税四錢
 羽化仙史著 (寫真版挿入) 小説奇モテ 郵税廿五錢
 鹿島櫻卷君著 (寫真版挿入) 小説探變裝の怪人 郵税廿五錢
 羽化仙史著 (寫真版挿入) 小説探極探 郵税廿五錢
 松林伯知講演 (寫真版挿入) 小説一休禪 郵税四錢
 松林伯知講演 (寫真版挿入) 小説一休禪 郵税四錢
 大阪時事新報掲載 (寫真版挿入) 小説左衛門豪遊奇 郵税三十錢
 池田夕女史著 (寫真版挿入) 小説少門豪遊奇 郵税四錢
 篠原嶺葉君著 (寫真版挿入) 小説ハイカラ夫婦 郵税四錢

大館發兌小說類書目

(13)

生田英直人著 (寫真版挿入) 小説家庭貴族の戀 郵税廿五錢
 羽化仙史著 (寫真版挿入) 小説家庭財婚夫 郵税廿五錢
 篠原嶺葉君著 (寫真版挿入) 小説家庭妾腹華 郵税四錢
 篠原嶺葉君著 (寫真版挿入) 小説家庭續安腹華 郵税四錢
 篠原嶺葉君著 (寫真版挿入) 小説探立志兄 郵税三十錢
 篠原嶺葉君著 (寫真版挿入) 小説探立志兄 郵税三十錢
 逆川樓主人著 (寫真版挿入) 小説家庭露 郵税四錢
 福田季月君著 (寫真版挿入) 小説滑臆病將 郵税廿五錢
 曉風山人著 (寫真版挿入) 小説滑魔窟の命美 郵税廿五錢
 羽化仙史著 (寫真版挿入) 小説怪奇薄 郵税四錢

府南野士著 (寫真版挿入) 小説新クレオパトラ 郵税廿五錢
 羽化仙史著 (寫真版挿入) 小説奇新クレオパトラ 郵税四錢
 羽化仙史著 (寫真版挿入) 小説奇モテ 郵税廿五錢
 鹿島櫻卷君著 (寫真版挿入) 小説探變裝の怪人 郵税廿五錢
 羽化仙史著 (寫真版挿入) 小説探極探 郵税廿五錢
 松林伯知講演 (寫真版挿入) 小説一休禪 郵税四錢
 松林伯知講演 (寫真版挿入) 小説一休禪 郵税四錢
 大阪時事新報掲載 (寫真版挿入) 小説左衛門豪遊奇 郵税三十錢
 池田夕女史著 (寫真版挿入) 小説少門豪遊奇 郵税四錢
 篠原嶺葉君著 (寫真版挿入) 小説ハイカラ夫婦 郵税四錢

府南野士著 (寫真版挿入) 小説新クレオパトラ 郵税廿五錢
 羽化仙史著 (寫真版挿入) 小説奇新クレオパトラ 郵税四錢
 羽化仙史著 (寫真版挿入) 小説奇モテ 郵税廿五錢
 鹿島櫻卷君著 (寫真版挿入) 小説探變裝の怪人 郵税廿五錢
 羽化仙史著 (寫真版挿入) 小説探極探 郵税廿五錢
 松林伯知講演 (寫真版挿入) 小説一休禪 郵税四錢
 松林伯知講演 (寫真版挿入) 小説一休禪 郵税四錢
 大阪時事新報掲載 (寫真版挿入) 小説左衛門豪遊奇 郵税三十錢
 池田夕女史著 (寫真版挿入) 小説少門豪遊奇 郵税四錢
 篠原嶺葉君著 (寫真版挿入) 小説ハイカラ夫婦 郵税四錢

